舞踊の感情伝達に関する因子分析的研究

佐藤節子

1. 目的

ダンスの振り付けで気を配る事の1つに，身体の表情が観客にどの様な印象を与えているのか，という事がある。この事を探る目的で本研究者が行なってきた研究結果[1][2]を継承し，次の2つの目的を掲げた。

目的の第1として，時空間の変化を伴う身体即ちビデオの，因子分析法による印象構造は，これまでの研究で扱ってきた変化を伴わない身体即ち写真とではどの様に異なるのかを探り，同時に身体の動きと感情の関係をも捕える。

目的の第2として，身体の文化差による表現技法の違いが，見る者にどの様な印象の違いを与えるのかを探る為に，世界の様々な舞踊の印象構造における位置づけを，視覚的に明示する事を試みる。

2. 方法

ビデオの評定者は，一般的な傾向を求める為，舞踊の専門的な知識の無い学生134人に依頼した。

ビデオの内容は，スペインの農民の無踊「ホタ」，沖縄の宮廷舞踊「諸鈍」，ソ連のバレリーナによる「瀕死の白鳥」，韓国の巫女舞を源流とする「サルプリ」，インドネシアはバリ島の「レゴン・クラトン」，インド南部の舞踊バラタ・ナティアムの「シバ神に捧げる踊り」，アフリカはチャドのバッダド族による娯楽の踊り「ジェルシス」，ハンガリーの男性の踊り「レゲーニッシュ」，ソ連はウズベクの民族舞踊「喜び」，日本のモダンダンス「湯女」の10種類とした。これらの舞踊を選んだ基準として，1～2人で踊られている事，2～4分である事，独特の表現技法がある事とした。又，身体の動きのみに注目してもらう為，音楽は伴わなかった。

評定尺度は増山[3]及び他の研究を参考にし，35の形容詞を4段階で評定してもらった。

評定期日は平成1年9月である。学生には1種類ずつビデオを見せ，そのつど評定用紙で評定してもらった。評定には約4分要した。又，3グループの学生に見せる舞踊の順番を替えて，順番による効果を極力避けた。

得られたデータは，形容詞（35語）×舞踊（10種類）×評定者（119人）の3相から構成される。評定者相を平均化し，形容詞（35語）×舞踊（10種類）の2相の行列を生データとして因子分析を行なった。解法は主因子法である。

3. 結果と考察

(1) 因子の解釈　時空間の変化を伴う身体の印象構造を探る。

固有値が1.00以上の因子の寄与率は，順に63.7％，18.7％，6.4％，4.2％となり，4因子で93.0％の累積寄与率を示す。次に，バリマックス回転後に算出された因子負荷量のうち，±0.67以上を高負荷を示すと定め，各因子を代表する形容詞とし，これらの形容詞に着目しながら次のように各因子の解釈をした。

第1因子は，穏やかさと，それに対する力強さや激しさに代表される「スタティック－ダイナミック」因子。第2因子は，腹立たしさ等の不快感情や屈曲性と，それに対する伸展性に代表される「屈曲－伸展」因子。第3因子は「恥じらい」の単極性因子。第4因子は，喜びやリラックスと，それに対する苦しみや緊張に代表される「リラックス－緊張」因子とした。

時空間の変化を伴う身体の印象構造を写真の場合と比較すると，写真の場合は第1因子が快－不快或いは伸展－収縮因子だったのに対して，ビデオの場合は力動性因子であるという事が大きな特徴だと言えよう。これは、金城[4]が舞踊鑑賞の印象構造として第1に力動性因子を挙げている事と一致し，ランガー[5]が「ダイナミックなイメージ，これが舞踊である」と述べる事を裏づける結果でもある。

(2) 身体の動きと感情との関わりについて

図1は第1，2因子の負荷量を2次平面上に散布し，同一平面上に2種類の舞踊の因子得点のベクトル方向を示した図である。

図1の右上に分布する「スタティック」「屈曲」「緊張」の各因子を代表する形容詞は近い位置関係にあり，一方，図の左下に分布する「ダイナミック」「伸展」「リラックス」の各因子を代表する形容詞は近い位置関係にある。この事より，怒り，恐れ，憎しみ，拒絶，苦しみ，悲しみといった不快感情は，スタティックな，屈曲した，或いは緊張した身体と関連があり，一方，喜び，希望といった快の感情は，ダイナミックな，伸び伸びとした，或いはリラックスした身体と関連があると推察される。

(3) 因子得点　表現技法の異なる舞踊の印象構造における位置づけ

それぞれの舞踊は，図1の右上の「諸鈍」から，

左下の「レゲーニッシュ」へと，斜めの線上に分布した。この事より，腰を落とし，すり足歩行でゆっくりと踊られる「諸鈍」はスタティックで，屈曲し，緊張して，不快な感情の印象を与え，一方，跳躍や複雑な足さばきを速いリズムで披露する「レゲーニッシュ」はダイナミックで，伸び伸びとし，リラックスして，快の感情の印象を与えると考えられる。そして，この両極の間の印象を他の舞踊は与えると考えられる。

4. まとめ

本研究では，世界の様々な舞踊のビデオを一般の学生に見せて評定してもらった。そして，その評定得点を基に因子分析を行い，因子負荷量を算出して印象構造を推察し，身体の動きと感情との関わりを捕えた。又，因子得点を算出し，各舞踊の印象構造における位置づけを試みた。その結果を以下にまとめる。

第1に，印象構造は「スタティック－ダイナミック」，「屈曲－伸展」，「恥じらい」，「リラックス－緊張」の4因子から構成されると考えられる。

第2に，不快感情はスタティックな，屈曲した，或いは緊張した身体と関連があり，快感情はダイナミックな，伸展した，或いはリラックスした身体と関連があると考えられる。

第3に，すり足歩行で踊られる「諸鈍」はスタティック，屈曲，緊張，及び不快な印象を与え，一方，複雑な足さばきを披露する「レゲーニッシュ」はダイナミック，伸展，リラックス，及び快の印象を与えると考えられる。そして，他の舞踊はこの両極の間の印象を与えると考えられる。

今後の課題として，これらの結果をより一般化する為には，舞踊の種類を増やす事，評定者の年令差や好みの差による印象の違いを考慮する事，顔の表情や衣装の色形が印象に影響を与えると考えられる事等，多くの検討が必要と思われる。

〔注釈〕

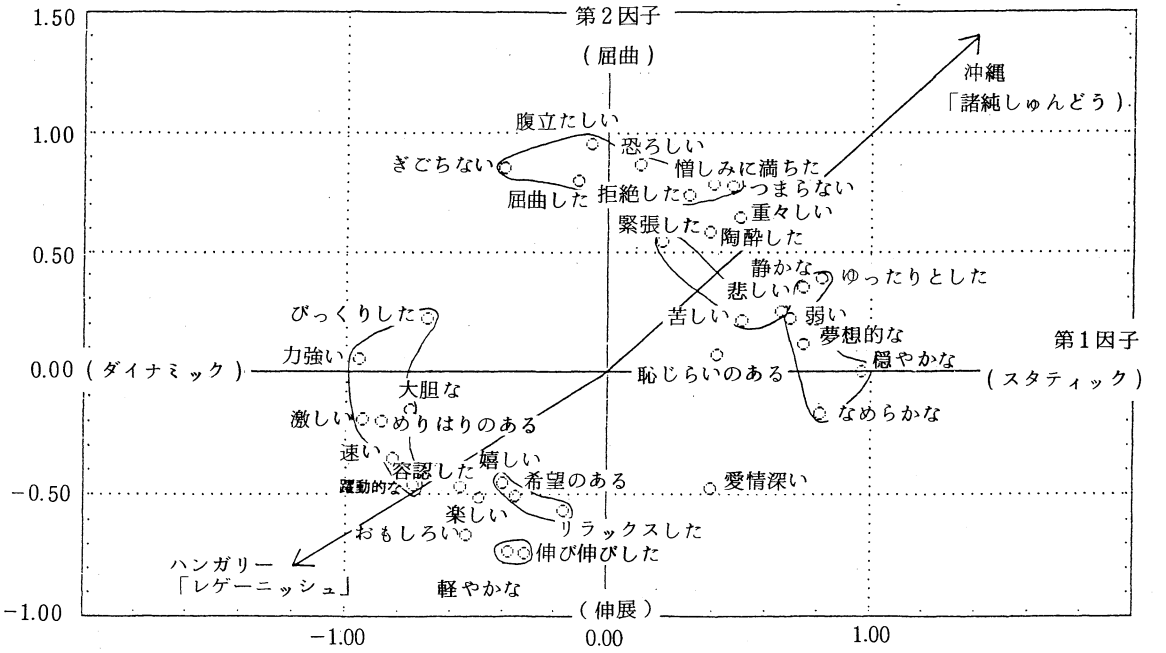
(1)石黒節子・糟谷節子「身体表情の因子分析的研究」舞踊学8号　S.60　P.32-33

(2)佐藤節子「身体表情の因子分析的研究－顔面表情との比較」山梨県立女子短期大学紀要　第21号　S.63　P.21-32

(3)増山英太郎「基本感情はいくつあるか－日本舞踊のイメージ調査を通じて」東京都立大学人文学部『人文学部』第183号　1986　P.17-42

(4)金城光子「舞踊の鑑賞構造に関する研究－意味微分法による－Ⅰ－2，Ⅱ－2」琉球大学教育学部紀要　第17集　1973

(5)Langer, S.K. "Problems of Art, Scribner" 池上保太他訳「芸術とは何か」岩波新書　1967　P.7

図1　因子負荷量散布図及び因子得点のベクトル方向（ベクトル方向は2種類の舞踊のみ）

○枠は第1, 2, 4因子を代表する形容詞